

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	島蘭進・鎌田東二・佐久間庸和共著 『グリーンケアの時代』を巡る考察
Author(s)	秋丸, 知貴
Journal	グリーンケア
Issue Date	2022-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	Publisher
URL	https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20220316026
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

島蘭進・鎌田東二・佐久間庸和共著 『グリーフケアの時代』を巡る考察

The Times of Grief Care by Susumu Shimazono, Tōji Kamata, and Tsunekazu Sakuma

上智大学グリーフケア研究所特別研究員

秋丸 知貴

Tomoki AKIMARU

要旨：上智大学グリーフケア研究所に在籍する島蘭進、鎌田東二、佐久間庸和が2019年に共著で出版した『グリーフケアの時代——「喪失の悲しみ」に寄り添う』の内容を詳細に読解する。併せて、本書に至るまでの彼等の研究の歩みをそれぞれの単著を基に分析すると共に、現在グリーフケアが広く社会に要望されている時代背景を多角的に考察する。

キーワード：死生学、グリーフケア、宗教、儀礼、死生観

はじめに

筆者は、『週刊読書人』2019年11月29日号に、島蘭進、鎌田東二、佐久間庸和が共著で出版した『グリーフケアの時代』（弘文堂・2019年）¹⁾の書評を執筆した。それは、この本が「なぜ今グリーフケアが社会的に注目されているのか？」という喫緊の時事的問題に的確に答えており、一般読者を対象とする書評誌で広く紹介する価値があると考えたからである。その後、筆者は2020年4月に上智大学グリーフケア研究所特別研究員に着任し、同書の著者達3名と同僚になったことで、彼等の研究や実践を間近でより深く学ぶ機会を持った。本稿は、前述の短い書評では十分に説明できなかった内容を補足し、それをさらにより専門的な読者へ幅広く紹介することを目的とするものである。

本稿では、まず『グリーフケアの時代』の内容を改めて紹介し、そこへと至る島蘭、鎌田、佐久間のそれぞれの問題意識の持続的展開について跡付ける。それにより、『グリーフケアの時代』の内容をより深く理解するための一助としたい。

1. 『グリーフケアの時代』について

それでは、なぜ今グリーフケアは社会的に注目されているのだろうか？

「グリーフ」は、何らかの喪失経験による重い悲しみを意味する。典型的には愛する人との死別による悲嘆であるが、生き別れ、大切な仕事や生活の場の喪失、誇りや生き甲斐の喪失等による悲嘆も含む。そうした悲嘆は、心を長く苦しめたり深く病ませてしまうことも多い。「ケア」は、そうした悲嘆に対する癒しを意味する。その意味では、グリーフ

ケアはいつの時代のどこの地域にもあったはずである。しかし、それが現在如実に人々の関心を集めるようになったことには明確な理由がある。

まず、島藺進は、宗教学者の観点からグリーンケアが20世紀末から21世紀にかけて重要度を増している歴史背景を次のように説明している（まえがき及び第1章）。

悲嘆は、家族や親しい人によって分かち合われると耐えやすくなる。そのため、伝統的に社会は悲嘆を分かち合う文化を育んできた。その主要要素としては、宗教と儀礼の二つがある。ところが1970年代以降、都市化の急速な進展で核家族化・単身化が進み、親族共同体や地域共同体が解体するという状況が生じる。それにより、親密な人間関係や共通信仰を通じて人々に絆や癒しを与えていた精神空間が著しく希薄化する。さらに、合理主義精神や科学技術の発達は、物質的繁栄を重視し精神的幸福を軽視する傾向を生むと共に、世俗化を通じて従来の宗教や儀礼をますます弱体化させる。これらにより、古来培われてきた様々な「悲嘆を分かち合う文化」が大きく喪失されるという事態が発生する。そうした人々の精神的な深まりや結び付きの衰退に加え、20世紀末からは破局的な自然災害や人為災害も多発している。そうした中で、改めて自然発生的に高まってきた心の慰安への欲求や互助精神こそが今日のグリーンケアへの関心の増加の要因といえる。つまり、表題の『グリーンケアの時代』とは、現代社会では各自が改めて自覚的に自らの「グリーンケア」に取り組まなければならない時代に入ったことを意味している。

これらの問題を詳細に検討するために、島藺はまず愛着対象の喪失による悲嘆とその解消についての普遍的な心理構造を、ジークムント・フロイトの「喪とメランコリー」（1917年）に探っている（pp. 20-24）。フロイトによれば、対象への愛着を整理し、対象に向けられていた心的エネルギーを断念し回収することが「喪（悲哀）の仕事」である²⁾。この「喪（悲哀）の仕事」は多大な心的苦痛を伴うので、従来その苦痛を和らげるために、宗教は経験に意味を与えて個人を納得しやすくさせ、儀礼は集団で感情や行動を共有して個人の安心と専心を手助けしていたといえる。

島藺は、ジェフリー・ゴラーの『死と悲しみの社会学』（1965年）等を基に、そうした「悲嘆を分かち合う文化」を支えていた伝統宗教に基づく地域共同体は、近代化により19世紀から凋落したと見ている（pp. 24-27）。そして、日本では1920年代から60年代にかけて精力的にその再建を目指したのが戦前の超国家主義や戦後の様々な新宗教であったと分析している。ところが、1970年代から21世紀にかけて、都市化の急速な進展は新宗教さえも時代遅れなものとし、心身共に人々の故郷喪失を悪化させ、精神的な飢餓感を増大させると共に、悲嘆を癒し合うことが極めて困難な状況を出現させている。

それでもやはり、悲嘆を通じて交流する人々の間では、素朴な信仰心や伝統的な死生観が再生し、「悲嘆を分かち合う文化」の再構築の兆しが見られる（pp. 45-65）。例えば、1985年の日航機墜落事故から生まれた「8・12連絡会」、1995年に水俣病の被害者や地域住民達が立ち上げた「本願の会」、そして2011年の東日本大震災を契機に登場した様々な

団体の活動等がそうである。島藪は、これらの最新の動向を踏まえて、今こそ伝統的な「悲嘆を分かち合う文化」とそれを根底から支えていた宗教や儀礼を再検討し再評価することが重要であると指摘している。

それでは、改めて「悲嘆を分かち合う文化」とは一体どのようなものだろうか？

この問題は、主に個人の内的救済に関わる宗教文化と、それを支える共同体の儀礼文化の2つの観点から捉える必要がある。本書の構成上、主に前者について論じているのが鎌田東二であり（第2章）、後者について論じているのが佐久間庸和である（第3章）。

まず、鎌田東二は、神主の資格を持つ実践的宗教学者の観点から、「人は何によって生きるのか」という問題を考察している。言い換えれば、それは古来人々は悲嘆に直面した時に何を心の支えにし、どのように癒されてきたのかという問題である。鎌田は、特にユダヤ教・キリスト教・仏教・神道等の宗教に注目して論を進めている。

ここで鎌田が重視するのは、体と心と魂の関係である。つまり鎌田は、人間は「嘘をつかない体、嘘をつく心、嘘をつけない魂」の三要素から構成されていると説いている。そして、「嘘をつかない体」と「嘘をつけない魂」をある程度自由に媒介する心をどのように働かせるかが、宗教における癒し、すなわちスピリチュアルケアの核心であると解説している（pp. 87-90）。

鎌田の分析によれば、まずユダヤ教やキリスト教は聖書の教えに癒しを求める（pp. 71-90）。例えば、ユダヤ教のラビであるH・S・クシュナーの『なぜ私だけが苦しむのか——現代のヨブ記』（1981年）のように、「嘘をつけない魂」に真に対応する答えを心が聖書の中に見出した時に悲嘆は癒されることになる。

また、仏教は執着からの解放に癒しを求める（pp. 90-98）。その心の現実的な処方として、理論としては「諸行無常」や「諸法無我」等の様々な哲学的思想があり、実践としては座禅や止観等の様々な身体技法がある。また、密教の三密加持や浄土教の称名念仏等は、修行により超常的な心の力を発揮して現世の諸問題を解決するとされる。

さらに、神道は心からの祈りと詩に癒しを求める（pp. 101-107）。つまり、超常的なレベルではシャーマニスティックな神懸りにより魂振りや鎮魂を行う一方で、より世俗的なレベルでは祭りや歌により負の感情を浄化する。また、本居宣長のように死後のことを一切考えないことも、平田篤胤のように死後のことを徹底的に追求することも、共に神道的な安心方法だといえる。

鎌田によれば、特に日本では、伝統的に現実志向の強い仏教と超常志向の強い神道が相携えて人々の苦悩を救済してきた歴史がある（pp. 99-100）。また現代では、2011年の東日本大震災を経て、宗教家が教義や宗派に関わらず人々の心に寄り添いグリーフケアを行う動向が生まれており、臨床宗教師はその代表的なものである（なお、日本臨床宗教師会は2016年2月28日に島藪進を初代会長として設立され、2021年4月から鎌田が二代目会長を務めている）。

結論として、鎌田は「死」は「史」を深め「詩」を物語る契機になると述べている。すなわち、人は死に直面すると自らの来し方や行く末に思いを馳せると共に、そこに科学的あるいは宗教的な意味を求める。そして、そうした物語化により「嘘をつけない魂」のレヴェルで自分自身や他者や世界と和解できたときに、死を巡る悲嘆も穏やかに解消できやすくと洞察している。

次に、佐久間庸和は、冠婚葬祭業を営む実業家の立場から儀礼がどのように人々の心を癒すかを論じている。

佐久間は、儀式の本質を「かたち」と見る (pp. 152-157)。つまり、本来人の心は不安定で一定していないが、何らかの形式に収めると一定の安定が生まれる。その形式とは、精神的には様々な物語であり、身体的には様々な約束事である。その両者を通じて物事を納得できた時に、人の心は癒されることになる。

このことが一番ははっきりと分かる儀式が、「葬式」である。すなわち、愛する人が亡くなったとき、遺族の心は不安定に揺れ動いている。その強烈な悲嘆や不安や執着は、遺族の精神を破壊しかねない。葬式は、そうした激しく動揺する遺族の心に形式を与えて安定させる役割を果たす。

佐久間によれば、まず葬式は、精神面では物語を通じて悲嘆からの脱却を助ける。つまり、「成仏」や「昇天」として捉えられた死は不幸ではなく救済である。葬式はそのドラマを可視化することで、遺族の心を癒すことになる。

また、葬式は、身体面では様々な約束事を通じて悲嘆からの社会復帰を助ける。すなわち、悲嘆に沈む人間はそのままでは内向的になり引き籠りがちである。これに対し、通夜、葬儀、告別式、法要等の一連の葬式行事は、悲嘆の時間と空間を一時的にリセットし、遺族を強制的に人前に連れ出し、参列者に挨拶やお礼の言葉を述べさせることで社会との接続を維持させる。また、遺族にしっかりと悲しむ時間と空間を与えると共に、感情と行動を共有することで残された人々の心を確かに結び付ける。さらに、年忌などの一連の法要も、定期的に儀式を開催することで残された人々の親愛と連帯感を強める。

もちろん、形骸化した儀式には何の効力もなく心がこもっていることが何よりも肝要である。その際周囲は、悲嘆の原因にはどのようなものがあるのか、また悲嘆からの回復過程はどのようなものであるのかについて知っていることが役に立つ。さらに、遺族に対して言うて良いことと悪いこと、行って良いことと悪いこと等の様々な知識も有用である。

佐久間によれば、こうした儀礼文化は時代に合わせてアップデートする必要がある。例えば、親族共同体や地域共同体が解体している現在、死別の悲しみを分かち合うための場としては会員制度による遺族会も有効である (pp. 158-163)。また、日頃から合同供養・会食・旅行・趣味の交流会で親睦を深めたり、共に笑い楽しむ漫談会を実施すること等も、これからの時代には有益であると主張している。

ここで注目すべきことは、島藺、鎌田、佐久間の三人とも、従来の宗教や儀礼はそのま

まのかたちでは世俗化や孤立化が進展する現代社会において十全な力を発揮できないと認識していることである。従って、こうした条件下で行われるグリーフケアは、超俗的な宗教のみならず、世俗的な芸術も含めて、あらゆる知識や技術を総動員して取り組まれる必要がある。むしろ、グリーフケアの現場においては、敷居が低く間口も広いけれども、しっかりと人の精神性を高めたり心の交流を生み出しやすい芸術が果たす役割は日に日に重みを増しているといえる。

こうした近年のグリーフケアにおける芸術の重要性を強調するのが、本書のもう一つの特徴となっている。実際に島藺は、唱歌・童謡・歌謡曲が感情の共有を通じて人々の心を深く結び付ける効力を高く評価している。また鎌田も、歌（詩）や音楽や舞踊が心身に大きな活力を与えると共に、人々の間に友愛や協調を生み出す力を持っていることに注目している。そして佐久間もまた、読書や映画が疑似体験を通じて様々な癒しをもたらすと共に、健全な死生観を育む効用があることに着目している。

このように、本書は小著ではあるが、現在のグリーフケアを巡る諸問題について、歴史（島藺）、思想（鎌田）、実践（佐久間）という最も基本的な三つの学問的観点を押さえて簡にして要を得た説明を与えるものである。ただ、読者はそれらが各論者の長年の研究のエッセンスであることを感受するが、さらに知見を深めようとする際に彼等の著作群は余りにも膨大なのでどこからアプローチすれば良いのか戸惑うところがある。そこで、次に改めて島藺、鎌田、佐久間の研究を単著を中心に辿り、それぞれの問題意識が本書に至るまでにどのように形成発展してきたかを解説したい。

2. 島藺進について

1948年生まれの島藺進は、2013年に東京大学大学院人文社会系研究科教授（宗教学宗教学史学）を退任後、上智大学グリーフケア研究所の2代目所長に就任した（神学部教授を兼任）。以後9年間、高木慶子初代所長の後任として同研究所の運営に尽力している。

島藺の上智大学グリーフケア研究所での担当科目は、東京四谷キャンパスと大阪サテライトキャンパスを合わせて、「宗教学」「死生学」「スピリチュアルケア原論」等である。あらゆる宗教を中立公正な立場から捉えると共に、その本質はもちろん魅力と危険性まで視野に入れてバランス良く分かりやすく解説する講義スタイルは研究所全体の基調を生み出している。

島藺の研究活動において特筆すべきは、2002年に東京大学大学院人文社会系研究科で21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」プロジェクトの初代拠点リーダーを務めたことである。また、2007年からはその後継プロジェクトのグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の初代拠点リーダーも務めている。これらの大型プロジェクトを通じ、欧米でも1960年代から注目されたばかりの新しい学際的学問である「死生学」

を日本に定着させるために、理系の医学部等も含むあらゆる人文科学・社会科学の研究者を組織して運営し、現在の東京大学死生学・応用倫理センターへと発展させた手腕は内外に広く知られている。

そうした実績を受けて、2016年に島藺は上智大学でも大学院実践宗教学研究科教授として死生学専攻の設立を主導している（神学部から転任）。そして、上智大学グリーンケア研究所所長として同死生学専攻との連携にリーダーシップを発揮し、上智大学グリーンケア研究所の学問的充実に努めると共にグリーンケアの社会的需要の高まりに応えている。

こうした島藺の研究を理解するためには、どうしてもその個人歴に言及せざるをえない。島藺家が代々医学研究者の家系であることはよく知られている。父方の祖父は東京大学医学部教授等を務めた島藺順次郎であり、父は東京医科歯科大学教授や国立精神・神経センター総長等を歴任した島藺安雄である。島藺自身も東京大学の理科三類に入学しているが、進学したのは文学部宗教学科である。

こうした医学から宗教学への進路変更については、島藺が学生時代を送った1960年代末が全共闘運動の全盛期であったことが反映していると、菅孝行は指摘している³⁾。つまり、東京大学医学部は近代西洋の合理主義の権化であり、その基本性格である要素還元主義に基づく近代西洋医学は、対症療法においては極めて有効けれども、人体を物理的メカニズムと捉えるために人格や生命の尊厳に対して十分な敬意を払わない。当時の硬直した既成の価値観に異論を唱える学生運動の時代精神は、島藺にいわば「医療」から「社会医療」への道を促したのではないかと考えられる。その後、島藺が宗教学に専心すると共に、狭義の宗教学の枠組みを超えて生命倫理や近代科学批判にまで研究を展開した歩みを辿るならば、そう考えるだけの十分な理由がある。

そうした島藺が宗教学の研究者としてテーマに選んだのは、近代日本宗教史、特に「新宗教」や「新新宗教」の研究である。この分野の代表的著作が、『現代救済宗教論』（1992年）⁴⁾、『新新宗教と宗教ブーム』（1992年）⁵⁾、『精神世界のゆくえ』（1996年）⁶⁾、『時代のなかの新宗教』（1999年）⁷⁾、『ポストモダンの新宗教』（2001年）⁸⁾、『〈癒す知〉の系譜』（2003年）⁹⁾、『スピリチュアリティの興隆』（2007年）¹⁰⁾、『現代宗教とスピリチュアリティ』（2012年）¹¹⁾、『新宗教を問う』（2020年）¹²⁾ 等である。

おそらく、島藺は自身の資質もあり、近代西洋医学の諸問題を考える中で、その克服の手がかりは近代において凋落した素朴な信仰心やそれに基づく人間相互の深い思いやりにあると考えたのではないかと思われる。しかし、少年時代以来島藺の目に映ったのは、従来の地域共同体に根差していた既成宗教が都市化に伴う核家族化や個人主義化に適切に対応できないのに対し、いわゆる「新宗教」や「新新宗教」が着実に多くの同時代人の信仰的需要を汲み取って発展している状況であった。さらに、特定の宗教団体に属さずに日常的合理性を超えた超越的神秘性を追求する、後に一般に「精神世界」と呼ばれる分野への

関心も広く高まりを見せていた。

そうした現実社会の生きた動向に、フィールドワークを重視する東大宗教学の伝統もあり、島藺は宗教学者としていち早く取り組むことが自らの学問的使命と考えたのだと思われる。島藺の著作の極めて目配りの良い俯瞰性と網羅性は、現在もなおこの分野の基礎資料としての重要性を有している。それらの中で、欧米の「ニューエイジ運動」と重なりつつもより幅の広いこれらの動向に、「新霊性運動」「新霊性文化」という言葉を与えて意識化させ広く一般に議論できるものとした功績は大きい。

島藺の研究スタイルで興味深いのは、常に研究対象を相対化して肯定にも否定にも偏らず、できるだけ正確な情報を幅広く総合的に提供するところである。それにより、読者は情報の客観性を信頼すると共に自らの頭で選択し判断することが可能になる。島藺は、「新霊性運動」に対してもその長所を的確に分析し、現代社会における意義と有効性を指摘しながらも、同時に様々な問題点も提示して決して安易な肯定には傾いていない。「新霊性運動」が極めて魅惑的であり、他の紹介者達が昂揚感の中で全面的肯定に流されやすかった分この特質は極めて貴重である。

この徹底した中立性が生きたのは、正に島藺の研究の歩みと並行し、「新霊性運動」の鬼子として急成長していたオウム真理教が1995年3月20日に地下鉄サリン事件を起こした際である（同年5月16日麻原彰晃逮捕）。既に警戒心を抱いていた島藺は、間髪を入れず準備していた『オウム真理教の軌跡』¹³⁾を同年7月20日に出版し、さらに1997年に『現代宗教の可能性——オウム真理教と暴力』¹⁴⁾を公刊している。当時、オウム真理教が不気味で得体が知れない分だけ冷静さを欠いた思い込みや感情論が飛び交う中で、問題の所在を客観的かつ根本的に問い直そうとする人達のために正確で詳細な情報を供給し議論の礎石となったことは極めて有益であったといえる。

しかし、オウム真理教事件は、脱近代西洋文明という点で「新霊性運動」に少なからぬ可能性を感じていたであろう島藺にも大きなショックを与えたと想像される。そうした問題意識の深まりを感じさせるのが、国家神道に関する研究としての『国家神道と日本人』（2010年）¹⁵⁾、『国家神道と戦前・戦後の日本人』（2014年）¹⁶⁾、『明治大帝の誕生』（2019年）¹⁷⁾、『神聖天皇のゆくえ』（2019年）¹⁸⁾、『戦後日本と国家神道』（2021年）¹⁹⁾等である。これらの著作は、一般に無宗教の国民性として知られる日本が実際には極めて信仰心の篤い精神風土であり、宗教に対してナイーブでいると簡単にマインドコントロールと人権抑圧のディストピアを生み出しやすい精神構造を持つことを警告する意図があったと思われる。また、これらと並行する『宗教学の名著30』（2008年）²⁰⁾もまた、宗教のプラス面とマイナス面に対する一般の関心を喚起し啓蒙する目的を持つものであったと推測される。

さらに、オウム真理教事件と共に、島藺の研究にとって大きな転機となったのが2011年の東日本大震災である。未曾有の大災害による深甚な喪失体験や悲哀と直面する中で、改めて大勢の人々の素朴な信仰心が高まると共に、形骸化していたと思われていた既成宗

教、特に仏教が現場の最前線で人心や社会の安定に役立つという現象が生じた。そうした仏教における社会貢献の潜在力について歴史的・文化的・思想的に考察したのが、『日本仏教の社会倫理』（2013年）²¹⁾である。この著作では、日本の仏教は伝統的に在家主義が強く、明治以後は近代西洋的価値観の影響も強かったため、個人主義的な信仰が上位とされるが多かったが、本来仏教はそれを公共的な道徳や実践に結び付ける「正法」もまた重視していた事実を改めて光を当てている。それにより、本書は仏教の健全な社会貢献にエールを送る意図があったと推定できる。

こうした宗教学上の神道研究・仏教研究に並行しつつ、前述の通り島園は2002年から21世紀COEで「死生学」に取り組み、また2013年に上智大学グリーンケア研究所所長に就任したこともあり、死生学上のグリーンケア研究を精力的に発表している。

この方面の最初の代表作が、『日本人の死生観を読む』（2012年）²²⁾である。近代化により、親族共同体及び地域共同体が崩壊し、既存宗教が衰退して、濃密な人間関係や共通の価値観が失われていく中で、死別の悲嘆を癒していた「喪の文化」もまた喪失される。そうした状況において、自らの死や愛する者の死を受容するためには、各自が自分なりの死生観を持たなければならない。本書は、そうした問題意識から日本の伝統的な死生観を歴史的・文化的・思想的に分析したものである。

また、人の生き方を巡る古典的名著を分析した『倫理良書を読む』（2014年）²³⁾でも、「喪の文化」を中心とする心のケアという主題に大きな紙幅が割かれている。さらに、従来の宗教はどのように人々の心を癒してきたのか、また宗教ほど厳格ではないけれども、様々な芸術、特に物語や詩歌はどのように人々の心を癒してきたのかについて本格的に考察するのが、『宗教を物語でほどく』（2016年）²⁴⁾や『ともに悲嘆を生きる』（2019年）等²⁵⁾である。

これに加えて、生命倫理分野の代表的研究が、『いのちの始まりの生命倫理』（2006年）²⁶⁾や『いのちを“つくって”もいいですか?』（2016年）²⁷⁾等である。そして、近代科学批判分野の代表的な研究が、『つくられた放射線「安全」論』（2013年）²⁸⁾や『原発と放射線被ばくの科学と倫理』（2019年）²⁹⁾等である。

以上のように、島園の研究の歩みは、宗教学を中心としつつ、狭義の宗教学の枠に留まらずに幅広く人間の信仰心とそれに基づく良心の可能性を模索するものだったといえる。そうした問題意識が、伝統的な「悲嘆を分かち合う文化」とそれを根底から支えていた宗教や儀礼を再検討し再評価を促す『グリーンケアの時代』の考察に繋がっている。

3. 鎌田東二について

1951年生まれの鎌田東二は、2016年に京都大学こころの未来研究センター教授（宗教哲学）を退任後、上智大学グリーンケア研究所副所長及び特任教授に就任した。担当科目

は、大阪サテライトキャンパスの「宗教学」「スピリチュアルケアと芸術」「文献講読」等である。

鎌田は、端的に言う「学者詩人」である。宗教学者として神道を始めとする宗教研究の第一人者であるのみならず、正式な神主の資格を持つ宗教家であり（「フリーランス神主」を名乗っている）、さらに詩人、歌人、俳人であり、CDも発売しているプロのシンガーソングライターでもある（「神道ソングライター」を標榜している）。

そうした背景もあり、鎌田は上智大学グリーンケア研究所がケアにおける芸術の重要性に着目して設置した講義「スピリチュアルケアと芸術」の大阪サテライトキャンパスのコーディネーターを務めている。この講義は、大学教育においてアートを通じたケアを本格的に学べる画期的なものであり、上智大学グリーンケア研究所の人気科目の一つである。特に同講義は、鎌田の幅広い人脈を生かして第一線で活躍するアーティスト（藤枝守、近藤高弘、松生歩、里村生英）を講師陣に招いているところに特徴がある（なお、筆者は文献学者として同講義の美学美術史分野を担当している）。

鎌田の著作は、極めて数多い。取り上げるテーマは硬軟様々であり、一貫した体系性から逃れるかのように自由で多彩な飛躍を見せている。個々のトピックは、極めて精神性が高く友愛に満ちるとも魅力的であるが、それらが一体どのように関連しているのかは一見よく分からない。そのため、表面的なソフトさや面白さとは裏腹に著者の真意は掴みづらくやや難解なところがある。

これに関連して、鎌田は自分を生まれつき「スピリチュアル」な人間であると公言している。この「スピリチュアル」は、「フィジカル（肉体）」や「メンタル（精神）」とは異なる、目に見えない何らかの霊魂的存在を否定しない心構えを指すものであると筆者は了解している。

何よりも不思議なのは、鎌田の先祖が源義朝の第一の郎党鎌田正清であり、彼が正月に酒を飲まされ騙し討ちで殺された経緯から、現代でも鎌田家では正月に自宅に酒を入れると山崩れで家が倒壊する等の神秘現象が起こると鎌田が主張していることである。また、鎌田は幼少期に他人には見えない「鬼」が見えたと言証している。さらに、鎌田は言葉が単なる意味伝達以上の不思議な力を持つとする言霊について博士論文を執筆している。

私の探求は、子どもの頃に「オニ」を見たということと、強烈な言葉の不可思議を感受したことに始まっている³⁰。

そして鎌田は、この世界は所々異界に通じているとする聖地研究も全面的に展開している。

空間はデカルトがいうような「延長」的均質空間ではけっしてない。世界中の各地に、神界や霊界やさまざまな異界と接触し、ワープする空間があるのだ。してみれ

ば、世界は聖地というブラックホール、あるいはホワイトホールによって多層的に交通づけられ、穴を開けられた多孔体なのである³¹⁾。

筆者の考えによれば、こうした鎌田の研究を理解するためには日本の伝統的な死生観が一つの手掛かりとなる。つまり、柳田国男の『先祖の話』(1945年)³²⁾が指摘するように、日本人の伝統的な世界観は「あの世(幽)」と「この世(顕)」が区切られつつも連続している。この両者は、時間的に特殊な状況や空間的に特殊な場所においては越境することが可能である。それが、いわゆる祭礼や聖地である。

人間は死ぬと、その靈魂は「顕」から「幽」に移行する。仏壇や盆行事がそうであるように、「顕」の生者は「幽」の死者と日常的に交流し供養を行っている。時々、死者の靈魂は子孫に転生し、やがて33回忌をめぐりに祖霊に溶け込んでいくとされる。

そして、磯部忠正の『「無常」の構造』(1976年)³³⁾が指摘するように、あらゆる価値の源泉は大自然にあり、その強い現れが神々であり、その弱い現れが人間であるとされる。大自然の根源は「幽」にあり、人間はその「幽」から伝わる大自然の働きを「顕」の生活に生かしていくために、できるだけ我を小さくして無心で生きることが理想とされる。

その際、「ケ」としての「顕」において、「幽」における大自然の根源に定期的にアクセスしようとするのが「ハレ」としての祭礼であり、その際人間は通常の「労働」の精神状態ではなく「遊び」の精神状態に入ることになる。

この「遊び」の精神状態は、コリン・ウィルソンの『フランケンシュタインの城』(1980年)³⁴⁾を参照するならば、比喩的な意味で「右脳」が活性化している精神状態と考えられる。また、そうした「右脳」が活性化している精神状態は、ジュリアン・ジェインズの『神々の沈黙』(1976年)³⁵⁾における意識の未発達状態を指す「二分心」概念を援用するならば、原始古代のある時期(約3000年前)までは人間において一般的だったと考えられる。さらに、これをまだ「左脳」の発達により「右脳」が抑圧されていない精神状態と捉えるならば、子供や、ごく稀に存在する「左脳」により「右脳」が抑圧されずに子供の心を持ったまま成長した大人においても事情は同じだと考えられる。このタイプは、視覚型と聴覚型に大別され、聴覚型の場合、言語は詩歌のかたちで表現されやすいといえる。

ここでいう「幽」は、カール・グスタフ・ユングが『自我と無意識の関係』(1933年)で説く「集合的無意識」と重なり合っていると考えられる³⁶⁾。また、「幽」を通じて大自然の根源にアクセスしやすいタイプは、集合的無意識と深奥で繋がっているいわゆる宗教家や芸術家に多いと考えられる。そして、この集合的無意識の根源にある聖性への志向を、エーリッヒ・ノイマンは『芸術と創造的無意識』(1954年)で「中心向性」と名付けている³⁷⁾。

筆者は、鎌田はこの「中心向性」の度合いの高い人間であると解釈している。この観点から、鎌田の研究は一貫して理解できる。

鎌田のデビュー作である『神界のフィールドワーク』（1985年）³⁸は、文字通り「幽」の世界を探索する研究であったといえる。また、代表作の『翁童論』（1988年）³⁹、『老いと死のフォークロア』（1990年）⁴⁰、『エッジの思想』（2000年）⁴¹、『翁童のコスモロジー』（2000年）⁴²の「翁童論」四部作は、「七歳までは神の内」という諺が示すように、「幽」と「顕」の転生において子供と老人は「幽」に近い存在という世界観を見直す研究であったといえる。また、『記号と言霊』（1990年）⁴³に始まる言霊研究は、主に聴覚型の観点から「顕」と「幽」の相互浸透的世界観を問い直すものであったといえる。さらに、『場所の記憶』（1990年）⁴⁴における聖地研究は、「顕」と「幽」の相互浸透的世界観を実地に調査しようとするものであったといえる。

また、鎌田の2006年に採択された日本学術振興会科学研究費補助金交付事業「モノ学の構築——もののはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」、及びそこから成立したモノ学・感覚価値研究会は、「顕」と「幽」が相互浸透している日本の感受性を考察することが目的の一つだったといえる。さらに、2011年に採択された科研基盤研究A「身心変容技法の比較宗教学——心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」、及びそこから成立した身心変容技法研究会は、「顕」と「幽」を結ぶ様々な身体技法を分析することが目的の一つだったといえる。

また、『歌と宗教』（2014年）⁴⁵は、主に聴覚型における「顕」から「幽」への意識変容の問題を論じるものだったといえる。さらに、『世直しの思想』（2016年）⁴⁶は、「幽」を否定して「顕」だけを全てと見なす近代的世界観の再考が目的の一つだったといえる。また、『世阿弥』（2016年）⁴⁷は、能が幽玄という美意識を通じて「幽」の死者を供養する鎮魂技法であることを読解することが目的の一つだったといえる。さらに、『日本人は死んだらどこへ行くのか』（2017年）⁴⁸は、文字通り「顕」から「幽」への移行の問題を再考することが目的の一つだったといえる。また、『言霊の思想』（2017年）⁴⁹は、主に聴覚型の観点から「顕」と「幽」の相互浸透的世界観を再評価するものだったといえる。さらに、『南方熊楠と宮沢賢治』（2020年）⁵⁰は「顕」と「幽」の相互浸透的世界観を表現している二人の代表的な思想家を比較考察するものだったといえる。そして、『ケアの時代』（2021年）⁵¹は、「顕」と「幽」の相互浸透的世界観を前提に現代生活の諸問題を再検討しようとするものだったといえる。

また、鎌田が編集した『講座スピリチュアル学』全七巻（2014–16年）⁵²は、「顕」と「幽」の相互浸透的世界観に基づく様々な学問分野の最前線の研究内容を網羅的に紹介するシリーズだったといえる。さらに、『身心変容の科学——瞑想の科学』（2017年）⁵³、『身心変容のワザ——技法と伝承』（2018年）⁵⁴、『身心変容と医療／表現——近代と伝統』（2021年）⁵⁵の身心変容技法研究三部作は、「顕」と「幽」を結ぶ様々な身体技法の最前線の研究内容を総合的に紹介するシリーズだったといえる。

これに加えて、『常世の時軸』（2018年）⁵⁶、『夢通分婉』（2019年）⁵⁷、『狂天慟地』（2019

年)⁵⁸⁾の詩集三部作は、主に聴覚型における「顕」から「幽」への意識変容の実践の一つだったといえる。

そして、2021年11月に開催された、鎌田が監修し、筆者が企画した、現代京都藝苑2021「悲とアニメⅡ～いのちの帰趨～」展、及び関連イベントである、アーティスト・トーク「悲とアートと宗教」、四つのシンポジウム「もの派の帰趨」「宗教信仰復興と現代社会」「日本人と死生観」「グリーフケアと芸術」、献華式、二つの茶会、鎮魂能舞舞踏もまた、そうした日本の伝統的な感受性や自然観や死生観が現代社会においてどのような意義を持ちうるかを理論と実践の両面で考察する試みだったといえる。

以上のように、鎌田の研究の歩みは、学者と宗教家を往還しつつ、宗教を巡る学問的理論と臨床的实践を深め合おうとするものだったといえる。そうした問題意識が、従来宗教はどのように人々の心を癒してきたかを論じる『グリーフケアの時代』の考察に繋がっている。

4. 佐久間庸和（一条真也）について

1963年生まれの佐久間庸和は、冠婚葬祭業大手の株式会社サンレーの代表取締役社長であり、一条真也のペンネームで100冊以上の思想的著作を持つ作家である（以下、一条として記述する）。

一条は、2018年に上智大学グリーフケア研究所客員教授に就任している。担当科目は、東京四谷キャンパスの「スピリチュアルケア原論」（コーディネーターは島蘭進）である。

鎌田と一条は、「ムーンサルトレター」と題して満月の度ごとにインターネット上で公開文通している。これは、2021年11月19日に200信を数え、これまで既に『満月交感（上・下）』（2011年）⁵⁹⁾、『満月交遊（上・下）』（2015年）⁶⁰⁾、『満月交心』（2020年）⁶¹⁾という5冊の本になっている。

一条の著作も、極めて数多い。社長業をこなしながら、エイジ・ブックス（自分の年齢と同じ数の著作の出版）を達成し、毎日長文のブログ記事を執筆している。驚くべきことに、その一冊一冊、一記事一記事が極めて高密度の内容であり、実際に2012年には第2回孔子文化賞を受賞している。さらに、「ハートフル」という概念を広く一般に定着させたプロのプランナーでもある。鎌田を「学者詩人」とすれば、一条は「詩人哲学者」であり「哲学的実業家」と形容できる。

そうした一条の研究を理解するキーワードは、「幸福」である。つまり、その活動の根底には、常にどうすれば人間を幸福にでき、社会をより良いものにできるかという強い志がある。

一条は、青年時代から「幸福」と名の付くものはできる限り全て目を通してきたという。その中で理解したことは、人間の幸福は「死」の問題を抜きにしては考えられないと

いうことであった。なぜならば、人間は必ず死ぬので、もし死が不幸であれば人間は決して幸福になれないことになるからである。この死をどう幸福なものへ転換するかが、今日に至るまで一条のライフワークである。

一条のデビュー作は、20代半ばで大手広告代理店東急エージェンシーの入社1か月後に出版した『ハートフルに遊ぶ』（1988年）⁶²である。この本は、バブル時代を反映して最新の若者文化を幅広く紹介するデータベース的性格を持ちベストセラーになる。当時のマスコミの取り上げ方も、『なんとなくクリスタル』で時代の寵児になった田中康夫の後継者的扱いであり、新時代のトレンドセッターの役割を期待されていた。

ところが、既に第2作の『遊びの神話』（1989年）⁶³で、一条は「ハート化社会とは彼岸の世界への関心が高まる時代でもあるのだ」（2頁）と書き、「ハートフルという言葉は『遊び』『幸福』『宗教』などと同義語である」（3頁）と述べている。このことから、一条は当時から物質的幸福だけではなく精神的幸福も重視していたことが分かる。

続けて、一条は『ゆとり発見』（1990年）⁶⁴、『リゾートの思想』（1991年）⁶⁵、『リゾートの博物誌』（1991年）⁶⁶を発表する。これらの本は、現世にいかにも桃源郷や精神的幸福を作り出すかを模索するものであった。

さらに、1991年に一条は代表作『ロマンティック・デス』⁶⁷を出版する。この本は、死を美しく物語化・儀式化することを称揚するものであった。

私は、死を美化したいと思った。死は美しくなければならぬと思った。なぜなら、われわれは死を未来として生きている存在だからである。未来は常に美しく、幸福でなければならない。もし死が不幸な出来事だとしたら、死ぬための存在であるわれわれの人生そのものも、不幸だということになる⁶⁸。

この本における一条の独創は、エリザベス・キューブラー＝ロス、レイモンド・ムーディ・ジュニア、立花隆等の最新の臨死体験研究を取り入れたことである。それは、死が必ずしも完全消滅や不幸ではないことを示すものであり、日本の伝統的の死生観とも繋がるものであった。一条はそれを踏まえた上で死を美化することを提唱し、さらに新しい時代にふさわしい葬儀のあり方として「月面聖塔」や「月への送魂」を発表し大いに話題を集めている。なお、この本は当時知り合っていないながら深く師事した鎌田に捧げられている。

続いて、一条は対談集『魂をデザインする』（1992年）⁶⁹や『ハートビジネス宣言』（1992年）⁷⁰を出版し、引き続き物語や儀式を通じた死の美化や現世における精神的幸福の問題を多角的に追求している。

その後、一条は東京から郷里の福岡県北九州市に帰り、実家の冠婚葬祭業を継いでいる。そして、実際の冠婚葬祭の現場に携わることで改めて儀式の必要性を強く認識するこ

とになる。その要点は、人生は常に心の動揺を伴っており、そうした動揺する心は外側から何らかの形式が与えられなければうまく安定しないということである。つまり、新しい状況や環境は心を著しく不安にさせるものであり、それを無事に収めるためには通過儀礼としての儀式が必要である。例えば、子供の誕生には初宮祝いが、成長には七五三が、成人には成人式が、結婚には結婚式が、老化には長寿祝いが、死には葬式がそれぞれ対応し、自らの自覚と周囲からの祝福により心を安定させ幸福感をもたらすのである⁷¹⁾。

この観点から、一条は約10年の思索の深まりを経て出版活動を再開し、2003年に『結魂論』⁷²⁾と『老福論』⁷³⁾を同時出版している。主に、前者は人生における結婚の意義と結婚式の重要性を考察するものであり、後者は高齢化社会における精神的幸福の在り方と長寿祝いの重要性を論察するものであった。

そして、そうした儀式の中でも一条が特に重視したのはやはり葬式である。なぜなら、元々一条は死を幸福なものに転化することに強い関心があったが、それに加えてそもそも葬式をしないと遺族の悲嘆が癒されず様々な健康上の弊害が発生することを実感したからである。つまり、「葬儀というものを人類が発明しなかったら、おそらく人類は発狂して、とうの昔に絶滅していただろう⁷⁴⁾」。

しかし、時代の潮流は、次第に葬式を簡略化する「家族葬」や、葬式を否定する「直葬」を支持する方へ向かっていた。そうした状況を受けて、2010年に島田裕巳が『葬式は、いらない』(2010年)⁷⁵⁾を発表し、少なからぬ話題を呼ぶことになる。

これに対し、一条はすかさずその約3か月後に『葬式は必要!』(2010年)⁷⁶⁾を緊急出版している。そして、この本の中で葬式がいかに関心の健康と平安にとって必要であるかを論証している。共に新書であったことに加え、その後論壇で繰り広げられた一条と島田の論争は大勢の耳目を集め、正に日本中の人心を二分するほどの大きな影響力を持つことになった。現在、「葬式必要論」の最大のオピニオン・リーダーが一条であることは衆目の一致するところである。

こうした経緯から、一条が改めて葬式を中心とする儀式の重要性を歴史的・文化的・思想的に読解したのが、『唯葬論』(2015年)⁷⁷⁾や『儀式論』(2016年)⁷⁸⁾等である。そして、そうした問題意識を改めて様々に社会提言したのが、『ハートフル・ソサエティ』(2005年)⁷⁹⁾やその改訂版の『心ゆたかな社会』(2020年)⁸⁰⁾等である。

一条の研究の歩みは、実業と学問の相互作用として冠婚葬祭を中軸とする儀式の重要性を広く社会に訴えるものであったといえる。そうした問題意識が、従来儀礼はどのように人々の心を癒してきたかを論じる『グリーンケアの時代』の考察に繋がっている。

おわりに

以上のように、『グリーンケアの時代』は、コンパクトながら現代日本社会のニーズに

広く応答する時宜を得た一冊であり、上智大学グリーンケア研究所に在籍する三人の論客の長年の考察内容の精髓^{エッセンス}である。そして、2012年に高木慶子初代所長を中心に上智大学グリーンケア研究所が取り組んだ『グリーンケア入門』⁸¹⁾に続く、研究所第二期を代表する研究成果の社会発信といえる。

謝辞 本稿執筆に当たり、的確で有益な助言を頂いた査読委員に感謝申し上げます。

〈注〉

- 1) 島蘭進・鎌田東二・佐久間庸和『グリーンケアの時代——「喪失の悲しみ」に寄り添う』弘文堂、2019年。
- 2) 秋丸知貴「ジークムント・フロイトの『喪の仕事』概念について——その問題点と可能性」『グリーンケア』第9号、上智大学グリーンケア研究所、2021年、67-83頁も参照。
- 3) 菅孝行「解説 国家の信仰から個人の宗教へ」、島蘭進『国家神道と戦前・戦後の日本人——「無宗教」になる前と後』河合文化教育研究所、2014年。
- 4) 島蘭進『現代救済宗教論』青弓社、1992年（新装版2006年）。
- 5) 島蘭進『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット、1992年。
- 6) 島蘭進『精神世界のゆくえ——現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年（改訂新版『精神世界のゆくえ——宗教・近代・霊性』秋山書店、2007年）。
- 7) 島蘭進『時代のなかの新宗教——出居清太郎の世界1899-1945』弘文堂、1999年（新装版、秋山書店、2007年）。
- 8) 島蘭進『ポストモダンの新宗教——現代日本の精神状況の底流』東京堂出版、2001年（文庫版、法蔵館文庫、2021年）。
- 9) 島蘭進『〈癒す知〉の系譜——科学と宗教のはざま』吉川弘文館、2003年。
- 10) 島蘭進『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007年。
- 11) 島蘭進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂、2012年。
- 12) 島蘭進『新宗教を問う——近代日本人と救いの信仰』筑摩書房、2020年。
- 13) 島蘭進『オウム真理教の軌跡』岩波ブックレット、1995年。
- 14) 島蘭進『現代宗教の可能性——オウム真理教と暴力』岩波書店、1997年。
- 15) 島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。
- 16) 島蘭進『国家神道と戦前・戦後の日本人——「無宗教」になる前と後』河合文化教育研究所、2014年。
- 17) 島蘭進『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』春秋社、2019年。
- 18) 島蘭進『神聖天皇のゆくえ——近代日本社会の基軸』筑摩書房、2019年。
- 19) 島蘭進『戦後日本と国家神道——天皇崇敬をめぐる宗教と政治』岩波書店、2021年。
- 20) 島蘭進『宗教学の名著30』ちくま新書、2008年。なお、次の著作はこの系統に含めうる。島蘭進『宗教ってなんだろう？——中学生の質問箱』平凡社、2017年。島蘭進『大学4年間の宗教学が10時間でざっと学べる』KADOKAWA、2019年。島蘭進『こども 世界の宗教——世界の宗教と人々のくらしがわかる本』カンゼン、2021年。

- 21) 島藺進『日本仏教の社会倫理——「正法」理念から考える』岩波現代全書、2013年。
- 22) 島藺進『日本人の死生観を読む——明治武士道から「おくりびと」へ』朝日新聞出版、2012年。
- 23) 島藺進『倫理良書を読む——災後に生き方を見直す28冊』弘文堂、2014年。
- 24) 島藺進『宗教を物語でほどく——アンデルセンから遠藤周作へ』NHK出版新書、2016年。
- 25) 島藺進『ともに悲嘆を生きる——グリーフケアの歴史と文化』朝日新聞出版、2019年。
- 26) 島藺進『いのちの始まりの生命倫理——受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社、2006年。
- 27) 島藺進『いのちを“つくって”もいいですか？ 生命科学のジレンマを考える哲学講義』NHK出版、2016年。
- 28) 島藺進『つくられた放射線「安全」論——科学が道を踏みはずすとき』河出書房新社、2013年（増補改訂版、2021年）。
- 29) 島藺進『原発と放射線被ばくの科学と倫理』専修大学出版局、2019年。
- 30) 鎌田東二『言霊の思想』青土社、2017年、2頁。
- 31) 鎌田東二『聖トポロジー——地霊の変容』河出書房新社、1990年、85頁。
- 32) 柳田國男「先祖の話」『定本柳田國男全集（十）』筑摩書房、1959年。
- 33) 磯部忠正『「無常」の構造』講談社現代新書、1976年。
- 34) コリン・ウィルソン『フランケンシュタインの城——意識のメカニズム』中村保男訳、平河出版社、1984年。
- 35) ジュリアン・ジェインズ『神々の沈黙——意識の誕生と文明の興亡』柴田裕之訳、紀伊国屋書店、2005年。
- 36) C・G・ユング『自我と無意識の関係』野田倬訳、人文書院、1982年。
- 37) エーリッヒ・ノイマン『芸術と創造的無意識』氏原寛・野村美紀子訳、創元社、2021年。
- 38) 鎌田東二『神界のフィールドワーク——霊学と民俗学の生成』創林社、1985年（青弓社、1987年。ちくま学芸文庫、1999年）。
- 39) 鎌田東二『翁童論——子どもと老人の精神誌』新曜社、1988年。
- 40) 鎌田東二『老いと死のフォークロア——翁童論2』新曜社、1990年。
- 41) 鎌田東二『エッジの思想——イニシエーションなき時代を生きぬくために翁童論3』新曜社、2000年。
- 42) 鎌田東二『翁童のコスモロジー——翁童論4』新曜社、2000年。
- 43) 鎌田東二『記号と言霊』青弓社、1990年。
- 44) 鎌田東二『場所の記憶——日本という身体』岩波書店1990年（改訂版『聖なる場所の記憶——日本という身体』講談社学術文庫、1996年）。
- 45) 鎌田東二『歌と宗教——歌うこと。そして祈ること』ポプラ新書、2014年。
- 46) 鎌田東二『世直しの思想』春秋社、2016年。
- 47) 鎌田東二『世阿弥——身心変容技法の思想』青土社、2016年。
- 48) 鎌田東二『日本人は死んだらどこへ行くのか』PHP新書、2017年。
- 49) 鎌田東二『言霊の思想』青土社、2017年。
- 50) 鎌田東二『南方熊楠と宮沢賢治——日本的スピリチュアリティの系譜』平凡社新書、2020年。
- 51) 鎌田東二『ケアの時代——「負の感情」とのつき合い方』淡交社、2021年。

- 52) 鎌田東二編『講座スピリチュアル学』全7巻、BNP、2014-16年。
- 53) 鎌田東二編『身心変容の科学——瞑想の科学 マインドフルネスの脳科学から、共鳴する身体
知まで、瞑想を科学する試み』サンガ、2017年。
- 54) 鎌田東二編『身心変容のワザ——技法と伝承 身体と心の状態を変容させる技法と伝承の諸相』
サンガ、2018年。
- 55) 鎌田東二編『身心変容と医療／表現——近代と伝統 先端科学と古代シャーマニズムを結ぶ身
体と心の全体性』日本能率協会マネジメントセンター、2021年。
- 56) 鎌田東二『常世の時軸』思潮社、2018年。
- 57) 鎌田東二『夢通分婉』土曜美術社出版、2019年。
- 58) 鎌田東二『狂天慟地』土曜美術社出版、2019年。
- 59) 鎌田東二・一条真也『満月交感（上・下）』水曜社、2011年。
- 60) 鎌田東二・一条真也『満月交遊（上・下）』水曜社、2015年。
- 61) 鎌田東二・一条真也『満月交心』現代書林、2020年。
- 62) 一条真也『ハートフルに遊ぶ』東急エージェンシー、1988年。
- 63) 一条真也『遊びの神話』東急エージェンシー、1989年。
- 64) 一条真也『ゆとり発見——余暇社会からゆとり社会へ』東急エージェンシー、1990年。
- 65) 一条真也『リゾートの思想——幸福の空間を求めて』河出書房新社、1991年。
- 66) 一条真也『リゾートの博物誌——空間演出のための理想郷カタログ』日本コンサルタントグ
ループ、1991年。
- 67) 一条真也『ロマンティック・デス——月と死のセレモニー』国書刊行会、1991年（幻冬社文庫、
2005年）。
- 68) 同前、3頁。
- 69) 一条真也『魂をデザインする——葬儀とは何か』国書刊行会、1992年。
- 70) 一条真也『ハートビジネス宣言』東急エージェンシー、1992年。
- 71) 一条真也『儀式論』弘文堂、2016年。特に、第14章「人間と儀式」を参照。
- 72) 一条真也『結魂論——なぜ人は結婚するのか』成甲書房、2003年。
- 73) 一条真也『老福論——人は老いるほど豊かになる』成甲書房、2003年。
- 74) 佐久間庸和「グリーンケア・サポートの実践」、島園・鎌田・佐久間『グリーンケアの時代』
156頁。
- 75) 島田裕巳『葬式は、いない。』幻冬舎新書、2010年。
- 76) 一条真也『葬式は必要！——最期の儀式に迷う日本人のために』双葉新書、2010年。
- 77) 一条真也『唯葬論——なぜ人間は死者を想うのか』三五館、2015年（サンガ文庫、2017年）。
- 78) 一条真也『儀式論』弘文堂、2016年。
- 79) 一条真也『ハートフル・ソサエティ』三五館、2005年。
- 80) 一条真也『心ゆたかな社会——「ハートフル・ソサエティ」とは何か』現代書林、2010年。
- 81) 高木慶子編著・上智大学グリーンケア研究所制作協力『グリーンケア入門——悲嘆のさなかに
ある人を支える』勁草書房、2012年。